

# レポート提出拒否!

立命館大学文学部同僚委員会 '69.3.26

全立命館の学友諸君! とりわけ文学部の学友諸君! 我々文学部同僚委員会はこの度の後期試験=レポート提出拒否することによって主張してきた、それは業斗争を契機として展開してきた立命館学闘争が、一体如何なる問題を突きつけてきたのか——ということも鋭利に推括する中で初めて語られるものである。立命館体制が「平和と民主主義」を基本理念としながらも、所詮はかの悪名高き国大協—自主規制路線の骨子と軌を一にする理事会—教授会自治として存在し、しかも一党一派による私利私欲の貫徹を志向する中で、教授会すらを空疎化せしめていた、この事實は、まさに立命館体制の構造的強迫であった。我々はかくの如き管理・支配体制を根絶的に否定し、自づこで営為されている学闘の名の下に於る革命的知識の切り売り、現行工学体制の普遍的に延べられる問題として自己存在性に賭き、具体的には教授との同窓区一月以来数度に亘ってもつ過程で、これを徹底的に追求してきた。しかしながら師範問題についてご文解決があいまいにされているばかりか当局—教授会は我々の突きつけた問題について何ら理解しようとしていない。彼ら教授会は、現在「改革委員会」なる右派の委員会を設置することによって既成改革を志向し、勇躍?として未来国のイデオロギイに心血を注がんとしている。だがしかし学友諸君! 我々の既成改革とは高専高クラス次元での「教授との対話」を深達しようとする、全く離断で小尻じみだ、小手先の改革案でしかない。然し、彼らが何を否定し、何が死滅したのかを主体的に把握することを抜きにしては「再生」としての工学改革を語る資格は全くないはずである。我々が学闘を語る時に必修することは、まず何れも自らの在り方を問題とするところであり、そして同時に教授の立場をどうつめることである。彼ら教授はしかし、一年間の授業を総括するという位置付けで試験を設定する一般性に陥って、我々を自らの授業成業を確かめる対象物に押し込めておいて、スケジュールの理想による対応を試験を捉えている。そして「改革委」の設立によって自らは全く偏つくこともなく完結されているのである。我々は彼らが一体如何なる自己の位置づけでもって現行工学体制下に於る教学担当者であらんとし、且つ研究者、教育者として如何に学闘対象との関わり方を志向せんとしているのか——という問いを突きつける限りに於て、彼らの自己存在的な特許意識と没主体的な研究至上主義的態度とを、更に強く批判的に追求せねばならない。

立命館体制の根元からの動搖過程で、何れもも露呈した立命館学闘の取捨状況に對して、我々は以上に示した内容を後期試験紛争闘争の中に位置付けると共に、選んで現行工学が持つ社会的な位置をも、日本資本主義の帝国主義的再編過程にあるものとして捉えていかねばならない。一般的に工学のスケジュールや秩序を語ることは、工学史没証史料に「理性の府」として規定するものであり、この秩序そのものが如何なる意味をもつのかを若象している。産業再編成過程と照応して一方でこれを保障すべく存在する現行工学体制の客観的役割を認識し、教学にまでこの動向を反映せしめている体制自体を止揚していかねばならないだろう。我々は辞職する教授が辞職したり、自ら「反動」と評する教員が同窓区を出したり、当局が教員の高代りちして問題を出している……等々の、全くデタラメな事態の中に、此の度のレポート試験のナンセンスな状況を見ることに、我々の闘争過程にある理念として不可避の問題であることをレポート闘争の中で理え、ボイコットによる闘争の思想的基礎の形成を以て脅かすに於る立命館学闘の一大集結を期するものである。全ての学友諸君、本日の文学部レポート提出拒否を切っ掛けとし、立命館学闘を一歩進進していく道に決起しようではないか。

全同窓、文闘委の視の下、本日の文闘委総決起集会に結集せよ!